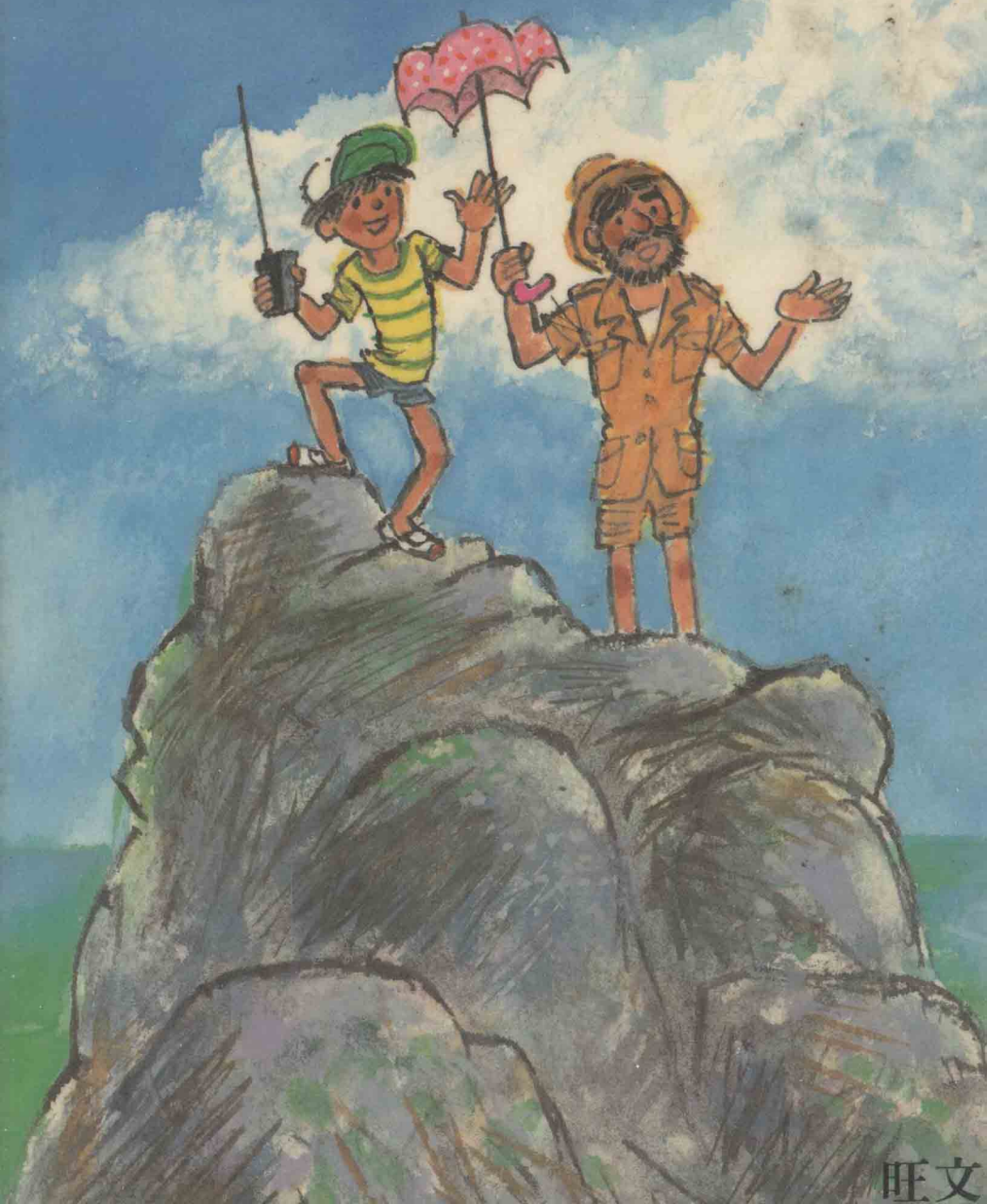


しげるの無人島

岡本文良 作 水沢 研 絵



N.D.C. 913 しげるの無人島

岡本文良・作

水沢研・絵

旺文社 1983

136p. 22cm

(旺文社創作児童文学)

小学中級以上

岡本文良(おかもと ぶんりょう)

1930年、茨城県に生まれる。東京大学文学部卒業後、編集者生活を経て、文筆活動にはいる。主な著書に「なにかがおこった日」、「冠島のオオミズナギドリ」(第1回ジュニアノンフィクション文学賞受賞)、「ころんでも夢は大きく」、「秋子のゆくところ」、「秋子の白い朝」、「シャカと天女と神の国」、「ばらの心は海をわたった」、「とら先生と海のにじ」、「ことばの海へ雲にのって」など。

水沢 研(みずさわ けん)

1924年、東京に生まれる。太平洋美術学校に学ぶ。多数の児童図書のさし絵・装丁を手がけて活躍しており、その独特なタッチが親しまれている。主な作品に、「のっぽ先生やめないで」、「東京どまん中セピア色」、「おとうさん×先生＝タヌキ」などがある。

現在、日本児童出版美術家連盟会員。

しげるの無人島

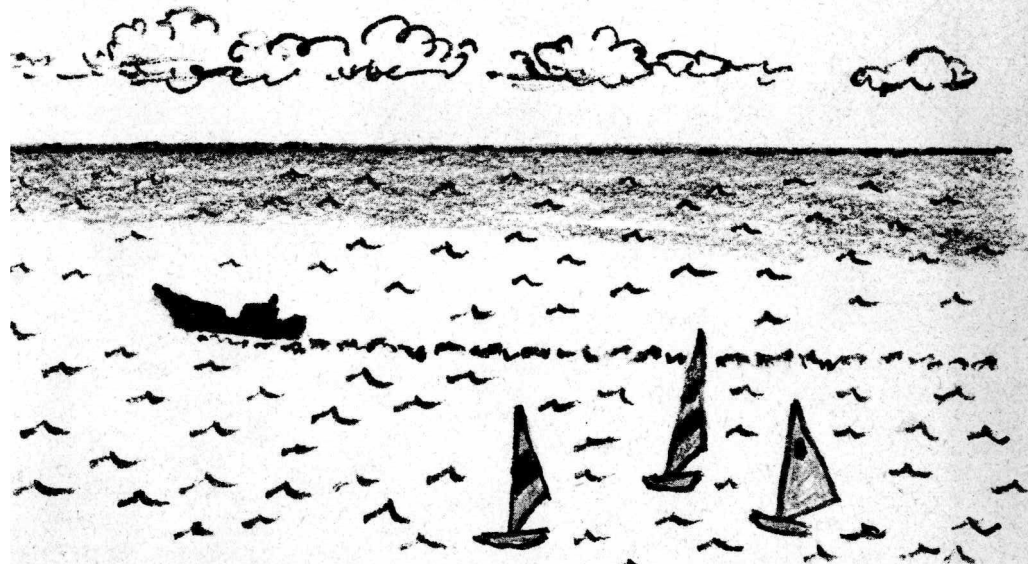
岡本文良 作 水沢 研 絵



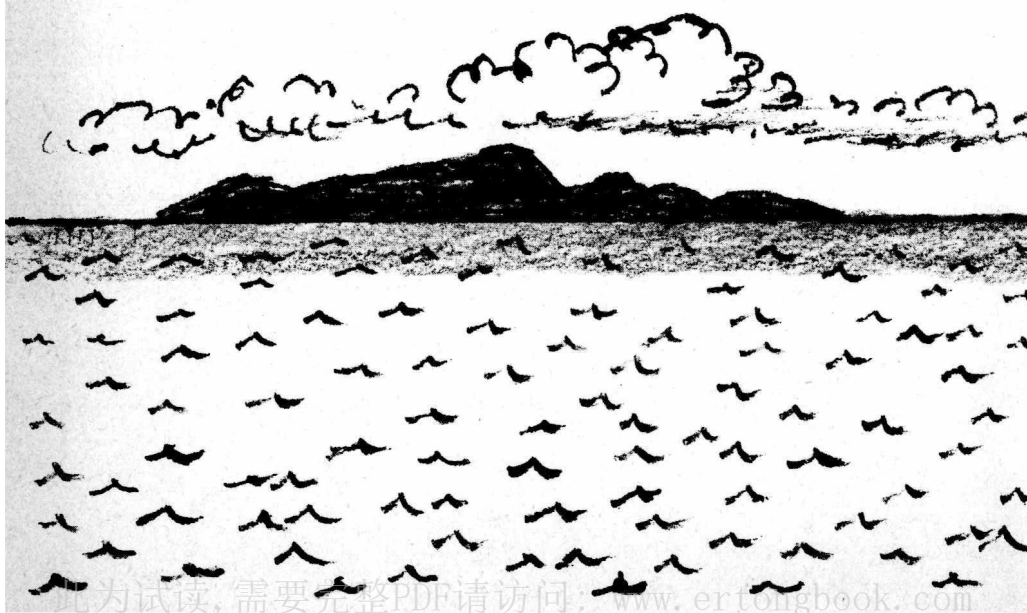
旺文社

もくじ

宝さがし？	5
ひそかな計画	12
無人島とお姫さま	21
名瀬 なせ の人たち	30
岩のたき	39
さいしよの夜	49



小屋づくり	61
水と無線とどろぼう	71
夜のお客さま	82
まぼろしの姫 ひめ	89
海賊と宝 たから かくし かいぞく	99
くさった水	107
あったか？宝 たからもの 物	115
あらわれた船	120
さようなら	126



装丁
さし絵

水沢

研

宝さがしっ？

沖へ出ると、少しうねりが出てきた。

長さが六、七メートルしかない、小さな五トンの漁船は、そのうねりにあおられて上下にゆれ出した。バシヤンバシヤンと、波がへさきにあたって碎ける音も聞こえた。しかしゆれ方は、しげるが思っていたほど、ひどくはなかった。

トン、トン、トン……、トン、トン、トン……。

漁船は、軽やかでたのもしいエンジンの振動をひびかせながら、うねりをこえていた。しげるは、気持ちよく、なまあたたかい南の風にはほをなでられた。

「あんたら、しあわせもんじゃ。このへんの海は、いつもおこつとるけん、船は大ゆれするのがふつうなんじゃ。こんな、なぎの日は、一年に何日もないんじゃ。」

暗やみの中から、船長さんの、かすれた、しよっぱいような声が聞こえた。

しげるは、うしろの方をふり向いてみた。もう、港も、港の突堤も、やみにのまれ

で見えなくなっていた。さつきまでは、漁業組合長さんとかず子が、懐中電灯を照らしながらその突堤の上に立っていたのだが……。

「しげるくーんっ、元氣で行ってらっしゃあい——っ。」

そう言うかず子の声だけが、エンジンや波の音にまじって聞こえてくるような気がした。

それにしても、なんというきれいな星だろう！　まるでこの世にあるダイヤモンドを、一つ残らず夜空にばらまいてしまったようだった。それが、無数に、きらきら、ぴかぴか、きらめいている。金色と銀色をまぜた光でまたたいている。

その中央を、天の川が、うすく白っぽいもようをえがいて流れる。

しげるは、なんだか、自分が宇宙船に乗って、神秘的な宇宙のはてに進んでいるような気持ちにひたった。

考えると、しげるは、これから実際に、お父さんと二人で、その宇宙のはてにある星のような無人島に行くところなのである。

お父さんの顔が、たばこの赤い火の中にぼうつとうかんだ。

「お父さん？」

「なんだね？」

「なんだか、楽しいね。」

「うん。このぶんでは、船よいの心配もなさそうだしね。それにこれから無人島ぐらしの冒険ぼうけんをするのかと思うと、お父さんも、久しぶりに興奮こうふんしてきたよ。」

またぼうつと、たばこの火が赤くなつて、お父さんの笑わらつたような顔がうかんだ。しげるは、低い船ひくべりによりそつて、片手を海中につけてみた。船が意外いがいに速く、手がうしろへもつていかれそうである。黒潮くろしほだからだろうか、海の水がなまあたかく感じられた。

やがて少しずつ、東の空が白みはじめた。一つ二つと星がうすれて、空全体に明るみが広がつていく。そのうちに水平線すいへいせんに赤みがさして、太陽の光がわきあがつてきた。海が、うすい金色にきらきらかがやいた。いつのまにか、星はまったく姿すがたを消している。大きな海鳥が、白いつばさを赤くそめてまい飛んでいた。

「きれいだなあ。ぼく、こんなのはじめて。」

しげるは、まばたきもせずに、生まれてはじめて見る、おごそかで美しい日の出に見入った。いつもこういう自然の中に生きている船長さんに、うらやましさを感じた。

「朝めしにせんね。腹へったやろ？」

船長さんが、新聞紙のつつみを甲板の上に広げた。のりでくるんだにぎりめしが、十個以上も出てきた。太いたくあんも、三本入っている。

船長さんは、潮でやけた太いうでをのぼした。にぎりめしをわしづかみにすると、無精ひげのはえた口を開いてかぶりついている。

しげるとお父さんも、手からはみ出しそうなにぎりめしをつかんだ。考えると、旅館で腹ごしらえしてきてから、もう五時間もたっていた。

「昼めしのときにや、さしみを食べさせてあげるからな。とりたての魚はうまいで……。」

「昼めしって？ 昼のごはんも、船で食べるんですか？ 玉姫島はそんなに遠いんですか？」

しげるが計算してきたところでは、玉姫島までは七時間ぐらいでいけるはずだった。



だから、午前三時に出れば、十時ごろには着けるはずだった。

「うん、やっぱり波にゆれたり、潮しほに流されたりするからな。着くのは、二時か三時になるんじゃないよ。ほら、まだ島の影かげも見えんじゃない？」

船長さんが、西の方を指さした。すっかり明けそめた海には、水平線すいへいせんが走っているだけで、島影しまかげ一つ見えなかった。

「なんだか水平線が丸く見えるようだね。」

お父さんが言った。そう言われてみると、なるほど、目の中いっぱいに入ってくる海が本当に丸くうつった。

船長さんは、すわったままうしろをふりむくと、ガラガラと音をさせてガスこんろを引っぱり出した。

「いま、茶を入れるけ。」

やかんをのせて、マツチで火をつけた。やかんがひっくり返らないように、はめこみ式になっている。そのうえ、こんろもガスボンベも、針金はりがねでうまく大きな板にしばりつけてある。

しげるとお父さんが感心していると、船長さんは、茶わんを三個、板の上にのせた。「それにしても、あんたらがわざわざ東京から来て、あんなさびしい島に住もうというのには、なにか深いわけがあると、わしはにらんどるんじやが。」

「深いわけと言われても……。ただ親子二人で、夏休みを利用して、無人島で原始人のような生活をしてみようというだけですよ。」

お父さんが笑うと、船長さんはさえぎった。

「うんにや、それだけじゃねえと、わしはにらんどる。」

しげるは困ってしまったように、ぎやくにたずねた。

「それじゃ、なにに行くとおもうてるんですか？」

船長さんは、さぐるような目をしげるに向けて、にやりと笑った。

「宝さがしじやろ？」

しげるは、思わずにやりとすると、船長さんの顔を見ながらだまってしまった。そう言われると、なんだか自分でもそのような気になってきたからだった。

頭の中に、これまでのことが、まるでテレビ映画のように流れはじめた。

ひそかな計画

「ねえ、お父さん、こんど学校が夏休みになったら、お父さんも長い休暇をとって、二人いっしょにどこかへ行かない？」

しげるがこんどの計画を思いついてお父さんに言い出したのは、しげるが五年生になつてしばらくたったときだった。

その日は日曜日で、お父さんも、めずらしく朝から家でのんびりしていた。

「なぜ急に、そんなことを言い出すんだね？」

お父さんは、おかふか、たばこをふかしながらたずね返した。

「だってお父さん、いそがしい新聞記者で、いつも日曜日さいじつも祭日もなく働いているだろ？」

「うん、まあそうだ。」

「だから、ばく、たまにはお父さんをゆつくり休ませてやりたいと考えたんだよ。」

「ほほう、それはなかなか親孝行だ。」

からかうように、お父さんが笑った。

「からかわないでよ。ぼく、真剣なんだから。」

しげるは、ぷりぷりした。そのくせ、心の中では、加藤玉恵のことを思い出していた。

加藤玉恵は、同じクラスの女の子で、ぱっちりした黒い目と、ふっくらした白いほほをしていた。しげるは、三年生ぐらいのときから、玉恵のことが好きだった。

好きだけれども、みんなに知られるといけないから、なんにもできなかった。ただ、運動会のときなどにそうっと応援したり、遠足のおべんとうのときなどに気づかれないうように近くにすわったりしていた。

玉恵の目やほほも丸いので、しげるは、玉恵に「しゃぼん玉」というあだ名をつけていた。あるとき、玉恵の気を引こうとして、しげるは「しゃぼん玉、しゃぼん玉」と玉恵のことをはやした。すると、玉恵が泣いてしまった。それを見て、しげるはひそかに玉恵以上に悲しがったり、しよげ返ったりした。

その玉恵が、五年生になると、まもなく転校して行ってしまった。お父さんが交通事故で亡くなったため、お母さんと弟といっしょに、お母さんのいなか引っこすことになったのである。

転校する日、玉恵は、教壇の上に立って別れのあいさつをした。

「せっかく、みんなといっしょに五年生になれたのに……。」

そう言うとき、玉恵はあんなにも言えずに泣いてしまった。

（ぼくが泣いたりしたら、たいへんだ。）

しげるはそう思うとき、玉恵の顔を見ないようにしながら、必死に涙をこらえた。その分、家に帰って夜になってから、ふとんの中で思うぞんぶん涙を流した。

つぎの日から、玉恵の席がぼつんとあいていた。しげるは、自分の心もぼつかりと穴があいてしまったような気がした。いつも玉恵のことばかり考えていて、先生の声が少しも聞こえなくなってしまう。

「おい、しげるっ、早く答えろっ。」

ときどき、先生の声ではっと気がつく。しげるはそのたびに、とんちんかなこと



KPN